

ば身の毛よだつ也、此度鰻汁をばゆるし給へと申ければ、其中に竹田庄右衛門と云年比五十計の老士聞て、亭主の申處理りまごくせり、唯今思はずまらず鰻のさた有しに、若き衆たはぶれ事に所望なり、我も此已前人の相伴に鰻汁をくひつるが、くふうちにも少心にかゝり、食して後も何とやらん忘がたかりし、鰻を食しては酒をのみたるがよきと聞つれば、われ下戸なれ共酒を多くのみたりしに、却て酒に酔て胸とゞろく、是は鰻故か酒故かと、まばしが程心元なく思ひつれば、酒さめたり、鰻食しては誰がおもはくも同じかるべし、然ときんば客に鰻をもてなす亭主は無分別者成べし、鰻無用と申されければ、若き衆是非のさたなし、爰に或老人此物語を聞いてひけるは、醫書に鰻は大温肝に毒ありとまると、然るに去年通町にて人々寄合、鰻料理せしが、此鰻人だめならずとて、手づから生鰻をあらひ肝を取て捨、血あひ骨迄も切捨て、みところ計をよくこしらへに、ごり酒に一時ひたし、料理して八人寄合まよくせしに、其内五人は則時に死、三人は十日ほど病て後本腹す、此人々町にても人にまられたる人也、鰻をくひあまた死たると沙汰あらば、かばねの上のちまよく成べし、時のくひちがひとてさたませず、

〔塵塚談_下〕河豚鰐魚我等

○小川顯道 享保頃人

若年の頃は、武家は決て食せざりしもの也、○中略河豚は毒魚

をおそれて也、二魚とも卑賤の食物にて、河豚の價一隻錢拾二文ぐらい、鰐魚は二三錢にて有しが、近歳は二魚とも、士人ももてはやし喰ふゆゑに、河豚は上市（上リ）一隻貳百銅三百銅にして、賤民の口へは思ひもよらず、○中略河豚も乾ふぐは、貴富も少しもおそれず喰ふ、

〔秋里隨筆_上〕備後鞆津鰻汁

爰に備後鞆の津は、近邊船だよりよき湊にして、日夜入出の船おふき繁津なり、かゝる海濱なれば、諸魚の價下直にして、全く自由をなす、時に此地別て鰻おふく食すことなり、餘國に異て、當地歴々の人だに是をいとはず食すに、尺にたらざる鰻は料せず、焚火にくべ、よき時分引出して、皮